
永遠の報い ～ Imperishable life

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の報い Imperishable life

【Nコード】

N9284E

【作者名】

冥界寺吹雪

【あらすじ】

不老不死のお話。不老不死なんて羨ましがるものじゃありません。

前編（前書き）

東方ではありません・・・とは到底言えない内容ですが、東方と断定出来る要素もありません。原作の話は完全に無視していますので、全く設定が異なりますが根本は同じはず。

前編

永遠。それは人間誰しもが一度は夢見るもの。時間、若さ、命……。それらは永遠によって輝き、またそれらは永遠を得ることは普通有り得ない。

人間はそれを知りなお、永遠を求めようとする。死を畏怖する人間にとって必然的にそれは追求の対象となっていたからである。

それが最も顕著に表れるのが不老不死。死ぬことの恐怖から開放され、老いることすら無くなる身体を求め幾多の者がそれを夢見ただろうか。その叶わぬと知れた夢を追え求め、輪廻転生の流れの下死んでいった人間は今となっては数知れず。

それが人間の愚かな考えだった。

不老不死には当然のことながら死が訪れない。本来なら死んでしまいうような苦痛にも悶え苦しみ続けなければならないだけでなく、過度の苦悩から開放されようと自ら命を絶つこともできない。

人間が畏怖する対象は死そのものではなく、それに伴う苦痛、苦悩なのだ。それに人間は気付くことができないのである。

それは当然と言えば当然のことである。苦痛を味わえば人は死ぬ。死なずに生き残ればそれは不老不死。死に繋がる苦痛を最後まで受けられるのは不老不死だけであって、人間は苦痛を受け続けることが出来ずに死んでしまうのだ。皮肉なことに、不老不死は死を羨むのである。

死の訪れる者は死を畏怖し、死の訪れない者は死を羨むのだ。

普通不可能な不老不死は、薬一つで可能になってしまった。それは月人の手によって精製され、地上に持ち込まれることとなった。それは、今より遙か昔の出来事になる。

「お父様、食事の支度ができましたよ」

十代と見えるまだあどけなさの残った少女が両手に大きなお盆を抱えている。机に並んだ数々の食事はどれも豪華なもので、大富豪を思わせる光景だ。

和室で書き物をしている男はそれらに見向きもせず、ただひたすらと腕を走らせていた。縁側に吊された風鈴が風に音をもらう。

「・・・お父様。早く召し上がらないと冷めてしまいますよ・・・」

少女の言葉に突然男は振り向き、凄まじい形相で少女をにらみつけていた。

「お前は黙って言うこと聞いてればいいんだよ！余計な口挟むんじゃないやねえ！！」

その声は少女を硬直させるには十分だった。男はすっと立ち上がり、動くことのない少女に掴みかかるとゴミでも投げ出すかのように縁側の外へ放り投げた。ずさつと鈍い音と共に落下する。

「ッ・・・」

言葉にならない悲鳴を上げ、動かない少女。同時、縁側を仕切る襖が閉められる音。

頭が揺らいだ。立ち上がろうとしても、身体に力が入らない。長く、長く、地面に伏せている気がした。頭を動かす事も出来ず、ただ地面に顔を押し付ける。

定感覚で畳を擦るような音が聞こえる。それが聞こえる度にじっと耳を澄ませ、その音の方に向かおうと腕に力を入れるが、身体はびくともしない。夢の中と似た感覚だ。力を入れているはずなのに、全く入らない。いつしか、意識すらも闇に奪われていった。

目を開けると、見慣れた天井が映し出された。続いて自分の身体を見ると、丁寧に布団がかけられている。

夢だったのだろうか。立ち上がろうとしてはしまった痛みで、その考えは捨てる。

布団をめくり、立ち上がる。

ああそうだ、早く朝食の準備をしなければ。またお父様に怒られて・
・・。

「・・・・？」

家が、いつにも増して静かだった。人気のない、というべきか。

少女は家中をゆっくりと歩き回り、そして台所にたどり着く。

・・・誰も、いない。

今までこんなことはなかった。出かける時お父様は必ず書き置きを残していくのに、それもない。

・
・
・
・
・。

何故だか分からないけど、なんとなく嫌な予感がした。

私は急いで家を飛び出そうとした。よく分からないけど、そうせずにはいられなかった。玄関に座り、草履を履き、戸を開けたその時。

「何処へ行くの？」

背筋が凍った。聞いたことのない、理想的な女性の声が私の後ろから聞こえた。振り向く勇氣すら出ないような、圧倒的な威圧感がそこにはあった。

「ねえ、おかしいわよね。この家、あなた以外誰もいなくて」

はやく・・・いなくなっしてほしい。

「こんなこと、今までなかったんでしょう？」

・・・聞きたくない。

「どこに行ったのかしらね。あなたの父親・・・」

「言うなああああ！！！！！！」

あの時急に身体が軽くなって、襖を開けて台所に走った。握りしめた包丁が肉を突き刺す感触。刺した元から赤いモノが溢れてきて。そんな感覚が腕から離れなくて。目の前が、真っ暗になって……。

本当は分かっていた。ただ、受け止められなかったただけなのだ。勝手に身体が動いている。自分の意志で、肉体が制御出来なくなっていたんだ。

だから……私は……

「悪くない。とでも言うの？」

ふっと、私の目の前に手につままれた玉が現れた。その手の主は……

「これを飲みなさい。あなたの罪、償わなければならない」

罪。私の……罪。

「まず罪を認め、そして償いを受ける。さあ、あなたも苦しみを味わうのよ」

吸い寄せられるようにその玉は近づいて、近づいて。そして私は、その玉を飲み込んだ。

意識が遠のき、視界が薄れゆく。最後に目にしたのは、長く黒い髪を揺らす、人間とは思えない程に美しい少女の姿だった。

中編

•
•
•
•
○

氣付けばそこには竹が生い茂っていた。美しい月が竹の葉の間からちらちらと顔を覗かせ、地べたを淡く照らす。

いつもより視線が低い。腰かけていた竹から離れ、直立するが、月の高さは変わらない。

そうだ。私は罰を受けた。罰を受けて……受けて？

罰、とは？なんだったのだろう。こうして竹林で眠っていたことだろうか。

そうだ、あの玉は？ 私は確か玉を飲まされて・・・そして、長い、黒い髪 of 少女を見て・・・。

あの少女は、何者なのだろう。罪とか償いとか取って付けた様な言葉ばかり言っていたけど・・・ただ、美しかった。

「あら、もう目が覚めたの」

背筋の凍る声。今度はすぐに振り向くことができた。

「なかなか強い人間なのね。・・・さて、私が話すことは一つ」

・・・何を、勝手に。

あの時見た美しい顔で、少女は続ける。

「あなたに与えたのは永遠の罰。もう、あなたは永遠の・・・不老不死の身体になった」

不老・・・不死・・・？

「二度と死の訪れることのない身体。決して老いることのない身体。訪れるのは、未来永劫尽きることのない時間ただそれだけ」

この人は何を言っているんだろう。不老不死なんて、御伽話の中のことじゃない。それを平然とした表情で・・・

「では、さようなら。良い人生を」

そう言う少女はくるりと背を向けた。歩いて、そして竹林の彼方へ・・・

「待つて！」

私は叫んだ。

「意味、分からないわよ。あなた、何なの！私をこんなところに連れ出して・・・」

少女は歩みを止め、少しも動かずに言う。

「あなたはもう、長い間同じ場所にはいられない身体なの。あの家ならなおさらね」

クスクスと笑い、少女は続ける。

「取り返しのつかない罪は、償い切れない罰で償うしかない。私と同じようにね」

「まっ・・・」

少女は消えた。竹林の向こうの闇に溶け込むように。私一人、先の見えない竹林に取り残されて。

そして、千年が経った。

「肝試し？」

黒い魔法使いの少女が聞く。

「肝試しの為に、わざわざ私たちをこんな竹林に？」

メイド姿の少女は不機嫌そうな顔と声で言う。

「いいい、嫌ですよお。そんな恐ろしいこと・・・」

半分人間は今にも泣き出しそうな顔をする。

「ま、いいじゃない。異変の後には必ず余震のような小異変があるんだし」

それに・・・と、巫女衣装の少女は続ける。

「あいつが行けって言ったのよ？何もないってことはないと思うけど」

一同うーんと唸る。

草木も眠る丑三つ時。竹林を歩む少女達の姿が朧げに見えるのは気の所為だろうか。

辺りが賑やかだ。こんな時間に、妖怪達が宴でも始めたのだろうか。この竹林に、私がいることを知らないのだろうか。

うつすらとした光と共に近づいてくる足音。賑やかな話し声。あれはまさか……。

まさか……人間？

「こんな夜道に人間さんが、この竹林になんの用だい？」

追い払わなければ。人間を殺すのは、好きじゃない。

「あら、これが肝試しの最終関門かしら？」

「なーんだ、ただの人間じゃねーか」

肝試し。人間が己の肝を試す為に自ら恐怖へ飛び込む、あの肝試しか？草木も眠る丑三つ時、妖怪の跋扈するこの時間に、人間だけで肝試しとは・・・

「ああ、何て愚かな人間かお前達は。今すぐ家に帰った方がいい。肝どころか、何もかも持っていてかれてしまう前に」

「ほ、ほらあ。ああ言ってますし、早く帰りましょうよお

「あんたは黙ってる」

巫女衣装の少女は続ける。

「まあ、これが肝試しの肝ならちょうどいいわ。人間相手は好きじゃないけど・・・」

巫女はお札を自らの周囲を囲むように展開させ、そのまま私目掛けて突っ込んでくる。

「一発で終わらせるわ。喰らいなさい！」

展開されたお札は次々と放たれ、その全てが私に向かってくる。私はそれらを同じくお札を展開させ、相殺させる。

「な・・・札の質がっ！」

巫女の札を掻き消した私の札は勢いを止めず、さらに拡散する。

「きゃあ!!」

その何枚かが巫女に直撃。その身体が強引に地面にたたき付けられ、思わず悲鳴をあげる。

「お、おい！大丈夫かよ？」

慌てて後ろの三人が巫女に駆け寄る。

・・・やはり、人間は脆い。脆いからこそ、痛い目を見てもらってでもこの場所から立ち去ってもらわなければならない。

それが彼女達の為だから。

「全く、何をやっているのよ」

・・・この声。

聞いた記憶がある。いや、忘れるもんか。

この声は・・・

「あら、お久しぶりね」

「・・・現れるの、待ってたよ」

心臓がはち切れるかのように鼓動しておさまらない。この感覚は、なんだろう。

「待ってた？ご冗談を」

千年の時を経て、

「恐怖に怯えたあの顔、今でも忘れないわ」

やっと、

「私を不老不死にした罪、償って貰うよ」

中編（後書き）

主人公達は何をしにきたのだろうか？

後編

視界は丑三つ時にも関わらず、常に光で照らされていた。美しい、弾幕の光。

私が炎の光で大地を照らすと、少女は五色に輝く玉で竹林を彩る。

あいつは本気を出していない。あの余裕な表情。・・・楽しんでいる？

「うふふ、千年も生きると人間もここまで力をつけるのね。・・・久々に、退屈しない夜になりそう」

少女は大きく手を振り上げる。集まっていくまばゆい光。光は少女を照らし・・・

「・・・!？」

その姿は月光に照らされた美少女そのもの。不覚にも見とれてしまった私は、目の前に迫るレーザーに気付かなかった。

「ぐう・・・！」

同じくレーザーで相殺を狙うも反応が遅れ、受け止めきれない。鋭い痛みは身体全身に伝わり、声をあげてしまう。

「く、そ。このっ」

さらに放ってくる拡散弾幕をかすり避け、何とかして間合いをつめようとするが、定感覚に撃たれるレーザーのせいで思いきった接近ができない。いざ弾幕をはろうにも既に弾幕をはられている手前、攻撃に移れない。綺麗な花には刺があるとは、よく言ったものだ。美しい弾幕は私を飲み込むように覆い、徐々に動ける範囲を狭めてくる。

「意気込みの割には防戦一方ね。・・・この程度の弾幕でもう限界？」

限界？ そんな訳ない。寧ろこれから・・・

「・・・これから見せてやるよ！」

私は避けるのを止め、腕に力を込めた。あいつを、全てはあいつを倒すために・・・

「ぐあっ！」

動きを止めた私に次々と弾幕が被弾し、痛みが蝕む。だが、この程度で落ちやしない。あいつを倒すには、この程度で落ちる訳にはいかない！

再び力を込め、腕を少女に向けた。その間にも肩に、足に被弾しよるけるが、無理やり踏み堪える。一撃を、確実に当てる。

「報いの炎・・・その身に受ける！！！」

放った炎は鳳凰を思わせる翼を羽ばたかせ、少女を飲み込んだ。そうだ、そのまま燃えて、燃えて、燃えて……。

「その炎で……全て償え！」

炎の中で、少女は笑っていた。

「・・・驚きね。ただの人間がこれほどまでに力を持つなんて・・・。
普通の人間が役に立たないのも仕方なかったのね」

っ。やはり、人間をここに仕向けたのは・・・。

「あなたの体力も限界のようね。なら、そろそろ終わらせましょうか」

少女は再び光を・・・いや、先とは比べものにならない、もっと眩しく、もっと怪しく。

「この難題が、あなたに解けるかしら？」

強烈光が視界を遮り、何も見えなくなつて、そして・・・

立っているのがやっとだった。視界は霞み、服は焼け落ち、足は力が入らず震える。

けれど、倒れる訳にはいかない。その思いだけで私は立っていた。いや、思いに立たされていた。

もはや弾幕を張る力も残っていない。勝てるはずない。分かっているけど、あいつを倒すまで、倒れる訳にはいかないんだ！

「・・・まだやる気？」

少女は怪訝な顔で聞いてくる。私は言ってやった。

「当たり前だ」

「そんな惨めな格好で、あなたも物好きね。・・・永遠の命がそんなに苦しい？」

平然とした表情で、よくもそんな！

「お前が一番分かっているくせに何を言う！・・・人として生きることも、死ぬことも出来ないんだぞ？それが、どれだけ・・・」

・・・何故、涙が出てくるんだ。止まれ、止まれ・・・止まれ！

「・・・どれだけ辛い。人間から受けた仕打ちが、どれだけ酷いか！」

人間は、一切老いる事のない私を見て妬んだ。皆とは違う、ただそれだけの理由でどの村からも迫害を受け、いつまでも同じ場所に住むことが出来なかった。寝るところもなければ食べるものもない日が続いたこともあった。

いつそ死んでしまおうか。何度も思った。いや、今だって思っているさ。こんな竹林の奥底でひっそりと暮らす日々なんてもううんざりだ。

でも、それは出来ない。

出来なくしたのは、全てあいつだ。

あいつさえいなければ、私は・・・

「ああああああ！！！！」

無我夢中で少女の懷に走り込んだ。感情は動かないはずの身体を無理やりにも動かし、悲鳴をあげた。私はもう十分償ったじゃないか。だから、次に償うのは・・・

「喰らえええ！！！」

声が裏返る。私は右手をにぎりしめ、拳を振りかざした。少女はそれを受け止めようともせず、ただこちらを黙って眺めている。

何のつもりだ？

考えてる余裕は私の身体にはなかった。足はもつれ、前のめりになってもまだ腕だけは少女をとらえようと軌道を保つ。

ガッ・・・

鈍い音がした。

少女は勢い余って後ろに吹っ飛び、そして受け身も取らずに倒れ込んだ。

あまりの抵抗の無さにバランスを崩した私も勢いを抑えられず、そのまま前のめりになって倒れこんだ。地肌が地面に擦れ、物凄い痛みがはしる。

「があ！」

身体なんてどうでもよかった。どうせ死なないんだ。寧ろこれで死ぬなら好都合じゃないか。

「もう、気が済んだかしら？」

立ち上がり様に少女は言う。

「そんな・・・訳・・・」

声を出すのがやっとだった。

「もういいわ。止めましょう、こんな無駄なこと」

「む、だ？馬鹿言うな。それはお前が決めることでは・・・」

「あなたの罪は何をしても消えないの。私を倒しても、何をしても
「違う！・・・お前は私を不老不死にした・・・その罪を償わせる
ために！私は！」

「あなた、かぐや姫のお話知ってる？」

突然、そんなことを聞いてくる。

「姫は月から地上に落とされ、地上で過ごし、やがて月の使者に月へと連れ戻される」

・・・何が、言いたい。

「何故、姫は地上に落とされたと思う？」

「・・・」

話すことがない。

「それは、罪を償う為なの。・・・不老不死の薬を服用した罪をね」

！？・・・不老不死が、罪？

「姫は薬を服用し不老不死になった。そして地上に落とされ、長くを生きた。そして姫は、月には戻らなかった。月の使者からも逃れ、地上でひっそりと暮らすようになったの」

「・・・」

「罪を・・・償おうとはせずね」

何故か少女の瞳は虚ろだった。

「不老不死は人間のみならず月の民にも渴望の対象。しかし、月の民は分かっていたの。皆が不老不死を望み、皆が不老不死になることがどれだけ愚かなことか。資源は枯渇し、居場所はなくなり、やがて月は民で溢れかえってしまう。だから月の民は、不老不死の存在そのものを罪としたの」

そん・・・な。ではこの千年、私は何の為に苦しみを味わったのだ？
そんなの・・・

「勿論、不老不死を望むこと自体が間違いよ。死ねない恐怖は、それこそ一生自らを蝕むでしょう」

「では、お前はそれを分かって・・・分かっていて私に薬を飲ませたのか！償いどころか、存在が罪の不老不死にする薬を！」

少女は虚ろな瞳を私の視線から外し、落とす。口を開こうとはせず、ただ俯き、黙る。

長い髪の毛のせいで、はっきりとした表情が見えない。

「何故だ！何故黙る必要が・・・」

「あなたを助けるには仕方なかったのよ！！！！」

聞いたことがない叫びのような返答に、たじろいってしまった。

「・・・どういう、ことだ」

「あなたは、とても病弱だった」

何故、それを・・・

「そう、あなたは幼い頃から不治の病にかかっていた。身体が大きくなるにつれて病は身体を蝕み、やがては死に至った。そうでしょう？」

「・・・何故、お前は私のことを知っているんだ。お父様を殺してしまったときもそうだ。私の全てを、見透かしたかのように・・・」

「あなたのお父さんに薬を渡していたのは私」

なん・・・だって？

「あなたのお父さん、確かにあなたのことを嫌っていたけど、それが本心ではないことはあなたにも分かっていたでしょう。だからあ
あして、私に薬を求めた。病が治るならどんな薬でもいいって、物
凄いいお金を持ってきたわ」

「お父様と・・・。だから、病のことを」

「ええ。あなたがあなたの貴族にとって望まれなかった子にも関わ
らず」

「それは、言わないでくれ」

それでもお父様は、私の病を治そうとしてくれた。素っ気ない返事
ばかりで全然かまってくれなかったけど、あんなに乱暴もされただけ

ど・・・。

「それでもお父さんは、あなたを見捨てることだけはしなかった」

そうだ。決して愛されていた訳ではない。でも、貴族主義で見栄えが重視され、私のような家系的に望まれなかった子は普通殺されるか、遠くへ置き去りにされた世の中、お父様は私の病を治そうとしてくれたんだ。

「どんなことがあってもあの子を治してやってくれ。何度も言われたわ。死なせたくない、今は不幸かもしれないけど将来、大人になればきつと幸せな人生が送れるから・・・って。だから私、仕方なく・・・薬を・・・」

何故そんなことを言うんだ。今言うなんて、卑怯じゃないか。

「もっと早く言えば！私は・・・千年のお前への怨みはどうしてくれるんだ！！」

自分でも何を言ってるのかわからなかった。ただ、行き場のないモヤモヤした気持ちをどこにぶつければいいのか・・・わからず、ただ目の前の少女に全てをぶつけるしかなかった。

「・・・」

そっと少女は私に歩み寄り、黙って身に纏っていた衣装を私にかけた。

なんだよ。・・・なんなんだよ。こんな気持ち・・・どうすればいいんだよ。

「・・・ごめんなさい」

少女は静かにそう言った。

胸が弾けそうなほど鼓動した気がする。

ただ、返す言葉もなくて

私は、初めて声をあげて泣いた。

後編（後書き）

妹紅の裸を書きたかった訳では決してない。

完結編

「あら、ここにいたの」

竹に腰掛ける私に少女は笑顔でいう。その手にはお皿に乗っただんごが数個。

「おお、今日の満月は一段と綺麗だからな」

「あら、じゃあ私も一緒にしようかしら？」

私の隣に座りながら、そう言ってくる。

唐突に私の目の前にだんごが差し出される。

「はい。本物の月の兎がついた餅だから、おいしいわよ？」

・・・言ってることはよくわからんが、とりあえずいただくことにしよう。

「・・・うん、うまい」

月は竹に見え隠れし、たまに私達を照らしてはすぐに隠れてしまう。

「しかしまあ、何でこんなにも長い間分かり合えなかったんだろうな。・・・いや、分かつたしなかったただけか」

私はこの竹林に籠り、最後まで少女と出会うことを恐れた。臆病になつていたんだ。真実を知ること。

「今更なに言ってるのよ、あなたらしくない。・・・それより、私の着物はどうしたの？」

「ああ、あれか」

私は隣に置いておいた袋から、着物を取り出す。

「ほら、洗っておいたぞ」

「・・・あら、それはあなたにあげるわよ？」

「はあ？・・・いい、いいよ。私には似合わん」

「あなた、ずっと同じ服じゃない。そういう服もたまには着てみなさいな」

むうと唸り、仕方なく羽織る。

「やっぱり似合ってるわ！いいじゃない、あなたにあげてよかった」

「・・・あ、ありがとな」

ちょっと前まであれほど憎んでいた相手と今、私はこうして笑いも交えながらお月見を楽しんでいる。

・・・不思議なものだ。今までの時間は、幻想だったのだろうか。

「ねえ、今度うちにも遊びにきなさいな。もう千年もここにいますでしょう？」

「ああ、それもいいな」

少女はにこにこ笑顔を向けてくる。その笑顔は、私には眩しすぎる程だ。

「うちには妖怪兔とか宇宙兔とか薬師とかもいるから、勝手に食べて食べないでよ？」

「誰が食べるか」

やっぱり、変な奴だ。

「ねえ、今でも私のことが憎い？」

唐突に聞いてくる。

「・・・今となってはどうでもいいさ。結局悪いのは私なんだ」

「・・・そんなこと」

突然暗い表情になる。表情のころころ変わるやつだなあもう。

「そんな話はもうおしまいだ。綺麗な月が、全部忘れさせてくれるさ」

すると少女はくすくすと笑いだした。

「うふふふ、何よそれ。あなたって意外とロマンチストなのね」

「な、べ、別にそんなんじゃない！」

「いいじゃないの。・・・ありがとう」

月明かりに照らされた少女の表情に、私はどんな表情で返しているだろうか。

それを知るのは、私の一番大切な人。

完結編（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。最後まで東方じやないかもしれない作品に仕上げましたが、どう頑張っても東方です。あなたの幻想が永遠に頼らずとも叶いますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9284e/>

永遠の報い ～ Imperishable life

2010年10月10日19時04分発行